

## 〈連載〉

選書・文：北川光恵（コ本や honkbooks）

PDF 制作：稲田駿平

## 一匹の書物 Vol.03

## 〈夢〉にシャコがいた場合

古書店であり、アートの実践の場でもある「コ本や honkbooks」が、『文化と生物学』をテーマに店内に眠る一冊を紹介する本連載。3号の特集である「宗教」と「シャコ」を切り口に、アンドレ・ブルトン編『夢の軌跡』を取り上げ、混沌とした現代で〈夢〉を読むことの意味を探る。

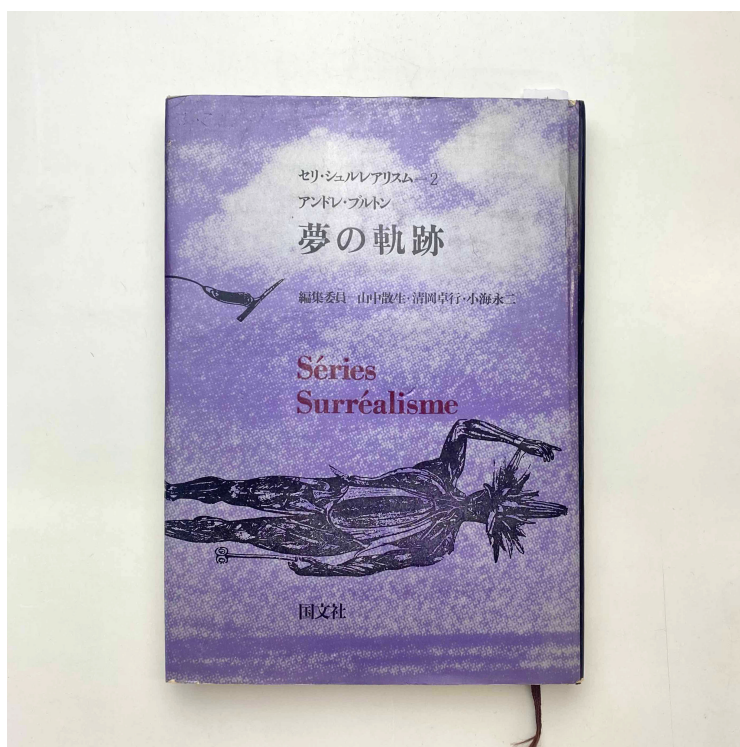


Figure 1.『夢の軌跡 セリ・シュルレアリスム 2』（国文社）アンドレ・ブルトン 編

もしシャコが夢に現れたら、私はそれをシャコであることを思い出したまま目覚めることができるだろうか。突拍子もなく、考えてしまう。回転寿司に通うまで魚の種類は「白いサカナ」と「骨のあるサカナ」くらいしかないと考えていたほど生物に疎い筆者は、たとえシャコが夢に現れたとしても、あれはエビ... いやセミだったと言ってしまいそうである。

「カンヴァスの上では、結節点、N、N'、N'' ...はいまのところ六つである。それらをじっと考えている、私はこれらの結び目のそれぞれが、実は一匹のライオンの臀部であることを確かめる」

『シュルレアリスム宣言』でよく知られるアンドレ・ブルトン、友人の画家オスカー・ドミンゲスがカンヴァスを広げ、絵を描いている夢を見た。ブルトンは後に、この夢がアントワープの動物園で見たライオンの性行為やドミンゲスの実際に描いた牡牛によって作用したと説明し、自分の夢を自分で分析する。六つの結節点が決定的なところライオンの臀部であった、という記述からわかるのは、夢に現れる生物が生物として登場するとは限らないこと、そして何より——ブルトンが自覚していたかは別にして——後からその生物を記述するとき、その生物の形は一度崩れ、書くことによって再び描き出されることである。つまり、それが本当のところライオンの臀部であるかは、今もわからないままなのである。そう考えると、シャコの強烈な図体を前にしても夢では別の生物として現れてもおかしくはない。

この〈夢〉はブルトンが編集した『夢の軌跡』に登場する。第二次世界大戦の足音がパリにも近づいていた1938年、ブルトンは、『G・L・M手帖』という雑誌で〈夢〉にまつわる特集を組んだ[1]。序文には、ブルトンが影響を受け、〈夢〉を「発明」したユダヤ人精神分析家ジークムント・フロイトが、本書の編集作業の最中に逮捕されたという噂を聞き、その身を案じる様子が見られる。フロイトは結局、逮捕されずにウィーンの自宅で隠居生活を送っていることが判明するのだが、翌年1939年には亡くなってしまい、奇しくもこの特集は、フロイトへ向けたアンソロジーのような体裁となっている。そこには、神秘思想家のパラケルススからプーシキンやミシェル・レリスなどの文学者までを取り扱い、夢の考察や夢日記、文学における夢など、様々な性質のテキストが並んでいる。加えて、画家のキリコやダリ、小説家のアレクセイ・レーミゾフの描いたドローイングも掲載されており、最後にはフロイトの書いた手紙の複写で締めくくられる。読者はページをめくるごとに、この一匹の書物が集めた多種多様な〈夢〉の欠片を見つけ出すことができるだろう。

抑圧的な国家主義や宗教的ドグマからの解放を目指しながら、第二次世界大戦という「暗い時代」を生きたブルトンは〈夢〉に夢を見たが、21世紀初期に生きる私たちが同じように〈夢〉について読んだり語ったりするのはなかなか難しい。宗教的ドグマにアレルギー反応を示す者もいる一方で、神秘主義的なものや夢の全能性を信じる者もほとんどいないだろう。では、なぜいま〈夢〉について読むのか。

ベルギー作家のマルセル・ルコントは、『変身』（カフカ）のグレゴール・ザムザはずっと夢を見ていたと解釈する。ザムザは「夢から目覚めたとき、自分がベッドの上で一匹の巨大な毒虫に変わっている」ことに気づく。けれどルコントは、本当のところザムザは、目覚めたのではなく、変身してしまった感覚を中断せずに半覚醒状態のままその〈夢〉を追求め、深めていったのだと解釈する。登場人物は言外で夢を見るのだろうか。ルコントはこの時、夢を見ている自覚のないザムザのことを、夢を見れる人として再度認め、物語にいる登場人物を生きた人物へと蘇らせている。

本書に描かれる様々な〈夢〉の欠片の真偽を問うのは、もはや野暮である。〈夢〉に神秘を抱かずとも、

それでもなお、〈夢〉は私たちを惹きつけ、現実を見るこの目を鮮やかにしてくれるのだから。本書が教えてくれるのは夢であることを願いたくなるような昨今の暗い現実が、それでもやはり「現実」であるのだともう一度確かめる様々な方法なのかもしれない。

## 注釈

1. あとがきによれば、本書はパリの出版社 G・L・M が刊行していた機関誌『G・L・M 手帖』第 7 号（1938 年 3 月刊行）の「アンドレ・ブルトン収集によるテキストと挿画から成る、〈夢〉にささげられた手帖」に掲載されたテキスト全文の翻訳である。この雑誌が後に、『夢の軌跡』と題して特装本となり、限定 315 部で刊行された。

## コ本や honkbooks

2016 年 6 月より活動するプラクティショナーコレクティブ。映像や書籍の制作、展覧会やイベントを企画するメディアプロダクションとしても活動する。活動拠点として「コ本や honkbooks」を運営し、プロジェクト・スペースとして「theca（テカ）」を併設する。青柳菜摘／だつお（アーティスト）、中島百合絵（企画制作ディレクター）主宰。2023 年 4 月に拠点を神楽坂に移転し、書店兼プロジェクト・スペースとしてグランドオープンした。

住所：東京都新宿区山吹町 294 小久保ビル 2 階

開館時間：12:00～20:00

休業日：火

<http://honkbooks.com/>